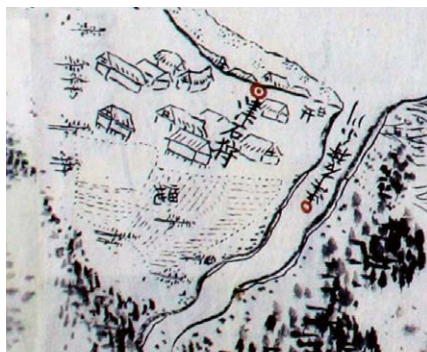


1/6(火)～14(水)まで市役所1階ロビーにて、
「石狩より千歳まで川筋見取略図」(複写)
を公開します。 ※最終日は15時まで



津石狩の畑。
横に流れる川は豊平川(現在は旧豊平川)

居」と注記されて数軒の家が描かれていますが、興味深いのは家のほかに床を高くした小さな建物が描かれていることです。これはアイヌ独特の倉庫(アイヌ語でP_u)でしょう。また、津石狩(現在の江別市対雁)の「会所」の周りに畑が描かれています。津石狩の畑は探検家の松浦武四郎も大豆、インゲン、大根などを作っていると記録していますが、描かれたものとしてはこれが唯だと思えます。

この地図が作られた時期も重

要です。当時、北海道は榎本武揚率いる旧幕府軍の支配下にありましたがその支配は半年ほどしか続かず、明治2(1869)年5月には明治政府に降伏するなど混乱していたため、ほとんどの資料が残っていない謎の時代なのです。しかし、この絵図を調べるることによって、幕末から明治にかけての石狩の歴史の中でちょうど欠け落ちていた部分が明らかになっていくことでしょう。

(工藤義衛^{ともえ})

謎の時代の石狩川調査絵図

昨年(平成26年)、秋田県にかほ市の象潟郷土資料館から、所蔵する「石狩より千歳まで川筋見取略図」の精巧な複写をいただきました。明治2年4月7日から13日(新暦5月18日から24日)にかけて、守屋利八郎という人物が石狩川の河口から江別を経て千歳に至るまでの川筋にあるサケの漁場、村落、建物、道路などを記録した絵図です。利八郎は象潟の商家森市右衛門家の三代目でアイヌ語に通じ、当時は石狩の

本陣(運上屋)に勤めていたようです。

石狩川流域では古くからサケ漁が盛んでしたから、地名や漁場名を記録した絵図はいくつも作られています。その中でも特にこの絵図が面白いのは、他の絵図に見られないようなものも描かれている情報量の多さです。例えば「ハッサフ川口」(発寒川と石狩川の合流点)の対岸、現在の中生振に「土人住



草ぶき風の家の間に
高床の建物が描かれている

イザリブの上流(現在の恵庭市漁太付近)のウライ。ウライはアイヌの伝統的なサケを捕る仕掛け。当時は各地にウライがあったが、絵図に描かれるのは珍しい



ハッサフ川(発寒川)と石狩川の合流点。家のそばに立つ細い柱状のものは、ほかの場所にも描かれている。漁場の標柱だろうか、それとも一里塚のようなものだろうか



「石狩より千歳まで川筋見取略図」

左側が下流。用紙の中に収まるよう蛇行する石狩川を直線化して描いている。残念ながら河口から現在の石狩湾新港付近までが欠けている

※絵図の入手にあたっては、道立アイヌ民族文化研究センターに大変お世話になりました。感謝申し上げます

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ(<http://www.i-eris.tv/>)でもご覧いただけます。



工藤義衛 Tomoe Kudo

専門分野は考古学と風俗史。石狩独特の文化を研究する一環で石狩の食を代表する「石狩鍋」の歴史やルーツについても調査を行う。